

きを得て漸く盛運に向かつたが、十六年冬大聖寺に大火災のあつた際、本社亦類焼に罹り、且つ經濟界の變動に遭遇して、社務急迫の狀態に陥つた爲、清は大に之を憂へ、翌十七年に至り歿した。是より先明治八年、清は又本郡片谷に黒鉛を發見し、鉛筆製造の業を起したことがある。本業は十數年の後廢するに至つたが、その着眼の功亦没すべからざるものがあつた。

アセイ 阿青 ↓ゾクハハソハラシユウ 蝦杵原集。

アゼクマリキジンジヤ 畔分堰神社 江沼郡内に在つた古社で、三代實録に元慶三年六月壬午從五位下に叙せられたと見えるが、その所在は明らかでない。

アソラ 阿曾良 鳳至郡中の部渚のうちの小字。阿曾良の名は文應二年の諸橋六郷田敷目録に諸橋・阿曾良・鹿並とあるが、甲の邑名はなく、甲社が見えるばかりであるのに、天文元年の諸橋六郷棟敷注文にはかぶと村があつて阿曾良村がない。しかれば能登名跡誌に、『甲山とて一國の名山あり云々。昔は阿曾良村といひしに、此山の形により今は甲村といふ。』と記したのは、恐らくは事實であらう。

アソラサンノウ 阿曾良山王 鳳至郡に在つた。文應二年の諸橋六郷田敷目録に神田二段阿曾良山王とあり、式内等舊社記に『阿曾良山王神社、諸橋郷阿曾良村鎮座、舊社也。』と見える。今甲のうち阿曾良に日吉神社あるものは是であらう。

アソラノイリウミ 阿曾良の入海 鳳至郡甲のうち、美屋古と阿曾良との間に挟まつた入海をいひ、その海に接する所には橋梁を架

して兩地を通じてゐる。

アタカ 安宅 能美郡粟津郷に屬する部渚で、梯川が海に朝する河口右岸に當り、古への北陸道を扼するに最も險要の所であつた。

故に延喜式に安宅驛があり、八雲御抄に安宅橋があり、壽永二年には林光明等築を安宅渡に設け、平維盛の俱利伽羅に敗れて背進した時にも、一旦安宅に據守し、又參考太平記金勝寺本の延元三年、越後勢の越前に赴く條には安宅・今深宿に十餘日まで逗留したと見える。近世に在つては弘治元年山崎宗安宅を攻め、永祿五年朝倉景行安宅に陣し、天正七年柴田勝家の安宅を燒夷した如き、皆その軍事上の要地たるを示すものである。

アタカ 安宅 (一) 謡曲の作者—幸若の謡物である富樫及び笈搜の二曲は義經記から來り、更に幸若の後を受けて、その脚色の散漫を緊縮し、その詞章の素樸を美化し、以て義經の逃竄史を大成したものが謡曲安宅である。抑謡曲の作者で最も手腕の卓越したものは世阿彌元清であり、世阿彌に繼いで樂頭となつたものはその甥普阿彌元重であつたが、普阿彌の子の小次郎信光も亦非凡の才識があつた。信光作る所の曲凡べて三十餘番。其中玉ノ井・羅生門・皇帝・胡蝶・張良・大蛇・遊行柳・盛久・船辨慶は今も尙演ぜられ、安宅を以て最大傑作とする。猿樂としての安宅が、夙く寛正六年三月九日將軍義政の院參した時に演ぜられたことは、之を親元日記によつて知ることを得るが、演者が何人であつたかは明瞭でない。但しこの日普阿彌の演じたものは、皆その名を註するに拘らず、安宅にはそれを記してゐないから、その演者は普阿彌以外

の大夫で、恐らくは作者たる信光自身であつたかを疑はしめる。而してこの推測の當るか否かを別にして、信光は永正十三年八十餘歳で歿したといふから、三十餘歳の時にこの大曲を作成したことがわかる。かくて能樂安宅が寶演を重ねるに従ひ、遂に秘曲として尊重せられるに至り、遂に無智の觀衆は、曲の内容その物を史實として誤信し、更に一面には江戸時代の演劇又は諸種の絃曲に之を踏襲することになつたものである。

(二) 脚色—謡曲安宅に於いては、辨慶が安宅に至つて勸進帳を讀むことがある。これは幸若の富樫にあることで、幸若は義經記の『判官北國落』の條と『平泉寺御見物の事』の條に基づいて、それに勸進帳の一段を加へたものである。而して勸進帳のことは、恐らく平家物語源平盛衰記の文覺勸進帳から換骨したものであらう。たゞ幸若では、謡曲の如く義經がその場面に顯れない。又謡曲安宅には、義經が一行の從者になりて關を過ぎることがある。これは幸若の笈搜に、一行が越後寺泊に上陸して、風つきの關に向かふ時、義經があいのふに身を扮して通過したとあることから來り、その笈搜は義經記の『直江津にて義經笈搜されし事』及び『如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事』の條から出たのであらう。たゞ一行が關を越えた後、富樫介が之に追及して芳醇を贈り、辨慶の『喝るは瀧の水』の曲を奏することのみは、謡曲の獨擅場で、能樂構成の要素たる男舞を舞はしめる必要から添加したものである。

アタカエキ 安宅驛 加賀の古驛で、阿多加と訓む。兵部省式に加賀國安宅驛馬五匹と

あるもの即ち是で、今の能美郡安宅に當り、驛路潮津からこゝを経て比樂に通ずるのである。但し和名鈔にはこの驛名を缺いてゐる。

アタカカハ 安宅川 上流大杉川は源を能美郡二ノ原山南方に發し、大杉に至り、北流して山間の溪流を併せ、流程二一軒にして土合に至り、尾小屋を流れる郷谷川を併せ、中に原曲し、千代に於いて遊泉寺より發する鍋谷川を併せ、平面に於いて富竹用水の分流入丁川を併せ、小松の北隅に出て梯川となり、その下流は安宅川と稱せられ、今江湯の水を容れ、北流して安宅より海に注ぐ。流程全長五〇軒。

アタカカモミヨウジン 安宅加茂明神 能美郡安宅に在つたが、今存せぬ。式内等舊社記に、『加茂神社。安宅村鎮座。稱三宮加茂明神。又稱安宅加茂明神。舊社也。』と見える。

アタカカサノ 安宅草野 能美郡粟津郷に屬する部渚。今は單に草野といふ。

アタカコウ 安宅港 能美郡安宅川の河口で、南東より北西に向かひ、長三〇〇米、廣一〇〇米、深さ二米餘、暗礁砂洲はない。出入には南西風に宜しく、北西風に悪しく、十月より三月に至る間は入港甚だ困難である。

アタカサキ 安宅崎 鳳至郡大澤と上大澤の中間から北方に斗出する小岬で、その附近をアタケが瀨といふ。

アタカサプロザエモン 安宅三郎左衛門 前田利常に仕へて初めて七百石を領し、貞享二年歿。子孫相繼いで藩に仕へた。

アタカシユウ 安宅集 一冊。金澤の俳人